

現代食生活の季節感に関する一考察

—過去と現代の蔬菜類から—

武蔵川女子大・家政 ○高橋享子 浅尾俊夫

目的] 本来 四季の区別の明確な日本の地理的、自然的環境下では食用植物などの成育は、季節毎に多彩であったと思われる。その為 それらを食物としていた食生活も季節に大いに影響を受けていたと考えられる。しかし 現在 情報化社会の発達、様々な技術開発の中で私達の食生活は、常に豊富な食糧供給の中で営まれているが、この様な環境から過去に見られた様な食物と季節感、自然感との関係の中での生活が希薄化してきてきたと考ええる。そこで 現代の食生活における食物と季節感との関係について蔬菜類を中心に、三の調査及び考察を行なったので報告する。

方法・結果] ①約25種の紀記及び農業書の資料、昭和59年度中央卸売市場資料から過去(上代、中世、近世)及び現代の蔬菜類数について調査した。その結果、上代50種、中世25~158種、近世45~140種と記録され、上代から中世には栽培種が非常に増え、非栽培種と合わせその種類は豊富であった。しかし 現代では年間約91種の野菜が流通しているが例えればその中の13種が伝統的葉茎野菜で、過去の葉茎菜(栽培38種、非栽培34種)と比べると伝統的葉茎野菜の選取幅が狭くなっている。②過去(鎌倉時代、清良記)と現代の蔬菜を各々四季に分け季内で食べられた蔬菜を現代も共通するのは、春^{22種}/99種、夏7種/46種、秋14種/78種、冬13種/37種と全体に少く、過去における各季の蔬菜数が非常に豊富であったことが再認識される。③本学女子大生約450名対象に「現在食べられている蔬菜類の中から27種の旬となる季節について」アンケート調査を行った。その結果、旬認識度が低いのは人参、大根、牛蒡、玉ねぎ等で、又高いのは、茄子、トコト、松茸等であった。